

沼崎一郎『台湾社会の形成と変容

——二元・二層構造から多元・多層構造へ——』

東北大学出版会 2014年 120頁（奥付含めない）

元・北海道大学助教

北海道大学大学院 文学研究科 博士後期課程修了 博士（文学）

寺沢 重法

1. はじめに—社会構造と社会変動から見た台湾—

現代台湾社会を論じる上で、エスニシティ（以下「族群」と呼ぶ）は欠かせないキーワードである。外省人と本省人の分断・対立は戦後台湾を特徴づける重要な社会構造である。日本統治時代に特徴的な「親日的」発言は、国民党に対する否定的な感情の裏返しであると説明されることがある。1980年代以降の台湾における民主化・本土化は、本省人（特に福佬人）による国民党および外省人に対する政治的・文化的対抗運動という面をもっている。近年の台湾の選挙においては「族群」言説が表面化することが多いが、大陸との政治的・経済的関係が政策上の重要議題となるにつれ、「族群」と政治との関連はより複雑になりつつある。一方で、外国人労働者や外国籍配偶者に代表される新移民の増加により、「族群」構成そのものに変化の兆しがある。

しかしながら、台湾には「族群」の問題として捉えきれないような社会現象も少なくない。昨今日本でも報じられたひまわり学生運動やLGBTの権利運動は、経済格差やマイノリティーの権利を巡る社会現象として理解できる部分もある。ただし、「族群」という視角でどこまで論じることができるのかについては注意を要する。さらに、権利運動以外にも目を向けるならば、「族群」、特に外省人と本省人の分断という枠組みで捉えるべきかどうかの判断が難しい社会意識も少なくない。たとえば、大陸での就労志向の高まりは外省人において顕著なのか、仮に本省人において大陸での就労志向が低いならば、それは戒厳令や二二八事件に対する否定的感情と繋がっているのか。台湾の若年層が日本のポップカルチャーを好むのは、日本語世代が日本統治時代を懐かしむのと同じ心理なのか。

台湾における「族群」の形成と変動の過程を、階層やジェンダー、世代などの他の社会的領域との関わりに目を配りながら論じることは大きな意味をもつ。本書はオランダ統治時代から現代にいたるまでの台湾の社会構造の変動を、「族群」を軸としつつ、階層やジェンダーなどの様々な社会的領域との関わりで論じた書籍である。副題にある「二元・二層構造から多元・多層構造へ」というモデルを提示しながら、一般読者を含む幅広い読者に台湾社会を解説することを目的としている。

著者の沼崎（以下、著者）は、これまでに「族群」と社会階層の変容を軸とした台湾社会論を発表しており（沼崎 1998、2012、2013）、本書はその一つの到達点と言える。一般読者のみならず、研究者や学生、特に台湾の社会構造に関心をもつ人々にとっても、本書は興味深いだろう。

評者は大学院修士課程、博士課程通じて社会学を専攻し、日本における宗教意識の計量的研究に携わってきた。縁があつて台湾研究に取り組み始めたのは、博士課程を修了した2012年である。それまで台湾に直接的に関わった経験はない。自学自習で台湾を学び始め、社会学や社会調査法の入門講義でも台湾を取り上げるようになった。本書は評者が台湾研究を始めた2年後に出版された。台湾社会を分析する枠組みと台湾の入門的知識の両方を学ぶことができる書籍を探していた時期に本書を読むことができたのは、大きな支えである。

本書評では、まず本書のメインテーマである「二元・二層構造」「多元・多層構造」に焦点を当てながら、本書の構成と概要を整理する。次に、台湾入門書、特に社会科学視点から書かれた台湾入門書という点についてその意義をまとめる。最後に、多元・多層構造の実証的分析を今後の課題として提示し、本書に触発されながら評者が行ったいくつかの分析を踏まえながら考えてみたい⁽¹⁾。

2 本書の構成と概要

本書のテーマである二元・二層構造、多元・多層構造は、台湾社会を先住者—外来者、支配者—被支配者という二つの軸を組み合わせた分析モデルである。まず「二元的」というのは「『先住者』と『外来者』が明確に区別できるということ」(p.28)を意味する。そして「二層的」とは「『支配者』と『被支配者』が明確に区別できること」(p.28)を意味する。そして二つの組み合わせさせた構造が二元・二層構造である。

たとえば本書第四章を参照しつつ蒋介石政権下の台湾を二元・二層構造で評者が考えてみると、まず、戦後大陸から台湾にきた外省人が外来人として存在し、戦前から台湾にいた漢人と原住民が先住者として存在する。台湾社会が外省人＝外来者、漢人＝原住

民＝先住者という軸で構成される二元的状況である。次に外省人が支配者として漢人と原住民を支配する構造は二層的である。しかも先住者の中にも、漢人が外来者であり原住民が先住者であるというもう一つの二元構造がある。外省人と本省人、漢人と原住民という「族群」カテゴリーは、こうした二元性と二相性の組み合わせによって表現することが可能であろう。

そして多元・多層構造は、外来者—先住者、支配者—被支配者という二つの軸が消滅し、台湾社会が複数の軸によって多面的に形成される構造である。著者は「集団と言う枠組みは解消され、個人を差異化する次元が多数存在し、多次元的な空間のなかで、個人が段階的に多数の層に別れている」(p.109)と述べる。

ふたたび、ひまわり学生運動を例に評者が推察してみると、以下のようなだろうか。国民党支持者の大学生は、民進党支持者の大学生に比べて運動に否定的な傾向があった可能性が推察される。だが、その外省人の学生も、台湾と大陸の経済関係の深まりによって台湾での就職先が減ることを危惧していれば、同じように就職を危惧する本省人の級友とともに運動に参加したのかもしれない。あるいは大陸の大学に進学した大学生は、台湾の大学生に比べて大陸での就労機会も多く、本省人か外省人かにかかわらず学生運動にはあまり関心がなかったのかもしれない。数十年前の台湾では社会運動への参加志向は外省人と本省人による違いが明確だったものの、昨今の台湾では、むしろ雇用不安や留学経験による違いが明確になり、その差を産み出す軸が複雑化してきたという現象が多元・多層構造から推察される。

本書は、台湾をオランダ統治時代(第二章)、鄭氏政權時代(第二章)、清王朝時代(第二章)、日本統治時代(第三章)、蒋介石時代(第四章)、蔣經國時代(第五章)、李登輝時代(第五章)、2000年以降の政權交代時代(第六章)というおよそ8つの時代に分類し、各時代における二元・二層構造の形成・変容が述べられている。そしてこれら各章が積みあげることで、二元・二層構造から多元・多層構造に変容するという台湾社会のマクロな社会変動が描かれている。

本書の構成は以下の通りである(まえがき、あとがき、文献リストなどは省略)。

第一章 「台湾」～名称、自然、地理～

第二章 オランダ統治時代から清朝統治時代まで～二元・二層構造の誕生～

第三章 日本統治時代の時代～二元・二層構造の確立と徹底～

第四章 蒋介石の時代～二元・二層構造の持続～

第五章 蔣經國から李登輝政権の時代～二元・二層構造の変容と溶解～

第六章 政権交代の時代～多元・多層構造の誕生～

第一章で台湾の名称、人口構成、地理などの背景的知識が紹介された後、第二章以下で二元・二層構造の形成と変容と多元・多層構造の誕生が述べられる。第二章ではオランダ統治時代、鄭成功時代、清朝統治時代が一括してまとめられる。17世紀にオランダ東インド会社が外来者として統治し、漢人移住者とオーストロネシア系の原住民がその支配下に置かれるという二元構造が成立し、同時に被支配者の中には外来者である漢人と先住者である原住民の区分が存在するという二層構造が成立し、台湾社会の二元・二層構造が形成される。その後、鄭氏政権、清王朝という順で支配者は交代するもの、いずれも外来政権が漢人と原住民を支配するという構図は同じである。ただ、漢人移民の増加と原住民の漢化（「熟蕃」の形成など）などにより、被支配者の中での漢人の影響力が徐々に強まっている。

第三章では日本統治時代において日本人（内地人）が外来者として植民地統治を行い、二元・二層構造が徹底化されたことが述べられる。漢人と原住民（高砂族）の二層構造もより明確化されるとともに、漢人と原住民に「われわれ意識」（p.49）が形成されたという。

第四章では蒋介石時代において、支配者は日本人から外省人に代わるものの、日本統治時代で徹底された二元・二層構造が一層強固になったことが指摘される。支配者の外省人と被支配者の本省人という構図が成立した時代である。

第五章で取り上げられる蔣經國と李登輝時代では、蒋介石時代の二元・二層構造が崩れ始める。高度経済成長や民主化により外省人と本省人の分断が曖昧になる。同時に、本省人の中には福佬人と客家人というカテゴリーが生まれ、原住民の権利運動が起こる。民主化や台湾アイデンティティの高まりの中で支配者としての優位性が揺らぎ始めた外省人においては外省人アイデンティティが芽生える。「四大族群」（p.88）（福佬人、客家人、外省人、および原住民）という概念、アイデンティティが形成される。外省人が支配者で本省人が被支配者であるという認識は、必ずしも台湾社会を的確に表現したものではなくなる。

第六章では多元・多層構造が誕生した2000年以降の政権交代が論じられる。大陸との関係の深化、大企業の影響力の強まり、東南アジアからの出稼ぎ労働、経済格差などを背景に、台湾の人々の社会的地位は、一層族群という単一の軸で決まりにくくなる。それとともに、職業や学歴、地域、ジェンダー、世代などの「族群」以外の様々な軸が複合的に人々の社会的地位を形成するようになってきている。

著者は「二元・二層構造が溶解した現代の台湾では、どういう職業についてどの程度の社会的・経済的地位が得られるかは、属している族群がどれかというだけでは決まらなくなった」(p.108)と指摘し、現代台湾社会は「多数の軸を組み合わせて多次元空間を作り、そのなかにならざる複雑な多層構造のなかになら個人を位置づけていく」(p.110)という「多元・多層構造」として説明可能であるという。

このようなモデルに導かれながら、植民地統治、経済、華人のネットワーク、民主化など台湾における重要な社会現象が解説されている。

3 本書の意義

本書のおおよその内容は以上の通りであるが、特に以下の三つの意義を感じた。

第一に台湾の概説書としての意義である。台湾研究入門書として長らく読まれてきたのは、『暮らしがわかるアジア読本 台湾』(笠原・植野編 1995)、『もっと知りたい台湾 第二版』(弘文堂(若林編 1998)などであろう。いずれも様々な分野のテーマを取り上げた良書である。だが、各テーマのディテールに重点が置かれている面があり、統一的な視点から台湾社会の全体像を鳥瞰するにはいささか不向きな印象も抱いていた。

たとえば、社会学やアジア社会の入門講義(二回から十五回)のテキストや読書課題に用いる場合、内容をかなり選択する必要がある、特に台湾の日常生活の描写は大幅に削らざるを得なくなる。だが、そのことによって台湾社会の重層的な構造が見えにくくなってしまふ。

一方、本書は、一〇〇頁強という比較的コンパクトな量である。台湾の時代区分に対応した章の中では、その時代の政治、経済、産業、「族群」の動態が、二元・二層構造の形成と変容、多元・多層構造の形成という視点のもとに手際よく整理され、台湾社会を体系的に把握することが可能である。各章の末尾にはその時代の社会構造をモデル化した図が提示されており、本書をよりわかりやすいものにしていく(p.29、p.48、p.74、p.91、p.109)。コンパクトでありながらも、霧社事件、二二八事件、白色テロ、老板、新移民などの個々の重要な社会現象が網羅されている。一つの章に一、二回を割り当てれば約十回の台湾社会を説概観することが可能である。各章もクリアにまとめられており、二、三回で台湾を取り上げるのであれば、一部の章を取り上げて完結させることも可能である。巻末の参考図書リストには、概説、社会、経済、文化などの各テーマに関

する文献が、入門書から専門書まで幅広く紹介されており、発展学習に有益である。

第二に「二元・二層構造から多元・多層構造へ」というモデルは、「台湾≒族群社会」というイメージの再考を促すものである。従来の台湾研究においても一般書においても、台湾社会論はいささか「族群」に集中しがちではないだろうか。その結果、台湾を専門としない人々に対して、「台湾≒族群」といイメージを与え、ともすると台湾社会が外省人と本省人の二項対立図式で理解されやすい印象がある。本書で言えば、第四章で述べられている蒋介石時代の社会構造、ならびに第五章で取り上げられている民主化や台湾意識の形成過程である。もちろん「族群」は台湾社会や台湾の特殊性を捉える上で不可欠のテーマだが、あらゆる現象を必要以上に「族群」に収束させるような向きもあり、そのことによって、階層やジェンダー、世代などの社会現象が「族群」の陰に隠れてしまいがちな印象も否めない。本書の特に第五章と第六章は、こうしたステレオタイプの台湾イメージを更新するものであり、台湾を専門としない人々に対してより多面的な台湾の姿を提示している。

第三に日本の社会学における台湾研究、ならびに日本の台湾研究における社会学的研究の両方の道標になろう。近年、日本の社会学において東アジア諸地域の比較研究への関心が高まりつつある。たとえば、日本における重要な社会調査である「社会階層と社会移動調査」(SSM 調査)⁽²⁾の2005年調査、日本版総合的社会調査(Japanese General Social Survey、略称JGSS)⁽³⁾においては韓国、台湾での比較調査も実施されている。台湾においては社会調査データのアーカイブスが充実しており、日本の社会学者も利用可能である。だが、台湾社会の分析は、韓国や中国大陸のそれと比べて相対的に少ない。

一方、日本の台湾研究の多くは、文学、歴史、人類学に関するものである。社会科学領域の研究であっても、政治、外交、産業に関するものが中心であり、階層、ジェンダー、社会意識、社会調査法などの狭義の社会学的研究はほとんど行われていない。台湾社会の社会学的分析は、日本の社会学・台湾研究双方における空白部分である。本書はこのような空白部分を埋め得る議論が展開されている。

4 次なる問い—「族群」を超える多元・多層構造をどう描くか—

本書は入門書としても書かれたものであり、個別の事例の詳細は省略されている。だが本書は、台湾の個々の事例を詳しく知ることよりも、台湾社会を論じるための新たな問いや分析アイデアを考える時にこそ威力を発揮する。

本書を通じて評者が強く興味を抱く次なる問いは、著者が提示する台湾社会のマクロ的社会変動をどのようにして実証的に示すのか、というものである。本書では2000年

書評 沼崎一郎『台湾社会の形成と変容—二元・二層構造から多元・多層構造へ—』（寺沢 重法）

頃から多元・多層構造が形成され始めているが、そもそも本当にそうなのか。「族群」が社会的地位を分ける有力な軸でなくなっているならば、どのような軸（ジェンダー、地域、職業など）が有力になりつつあるのか。実証研究によって著者のモデルを確かめ、より深化させることに大きな意味があると考えられる。

評者は、このような問いに関して、「台湾社会変遷基本調査」（Taiwan Social Change Survey、略称 TSCS）⁽⁴⁾（中央研究院実施）という大規模社会調査データを用いて、台湾における社会意識が「族群」を含む社会的属性によってどのように規定されているのかを計量的に分析したことがある（その多くは本書に触発されて行ったものである）⁽⁵⁾。

結果、「族群」によって明確に規定されているのは、台湾独立への賛否などのナショナル・アイデンティティに関する社会意識に限定され、その他の多くの社会意識と「族群」の間の関連は小さいものであった⁽⁶⁾（寺沢 2017）。たとえば、階層帰属意識（自分がどの階層に属しているのかという主観的評価）と「族群」の間には統計的に有意な関連は見られず、学歴や職業との間に統計的に有意かつ相対的に強い関連が見られた。二元・二層構造のイメージからすれば、外省人は階層帰属意識が高い一方で本省人は階層帰属意識が低いという結果が予想していたものの、そもそも「族群」自体に明確な関連は確認されなかった。

日本統治時代に対する賛否については、特に若いコーホートにおいて、階層要因が「族群」と入れ替わるように規定力をもっていた⁽⁷⁾（寺沢 2015a、寺沢 2016b）。台湾最大のボランティア団体である慈済会は閩南系本省人コミュニティと評されることがあるが、会員の「族群」差は徐々に不明瞭になりつつある⁽⁸⁾（寺沢 2015b）。宗教意識全般も必ずしも「族群」によって強く規定されているわけではない⁽⁹⁾（寺沢 2016a、2016b；Terazawa 2015）。台湾において社会意識を規定する軸は「族群」ではなく、社会階層要因を中心とする多面的な社会的属性であることが推察される。台湾の社会意識の規定構造は確かに多元・多層構造である、というというのが評者の実感である。

この実感からさらに次のような問いが生じる。「台湾はいつから多元・多層社会に変化し始めたのか」「多元・多層的状況は台湾社会全体の大きな社会変動なのか、あるいは一過性の風潮、一部の世代に特徴的なものなのか」「『族群』という軸が見えにくくなっているならば、台湾は日本と同じような学歴社会や格差社会になりつつあるのか」「そもそも台湾はもともと『族群』社会だったのか」。

台湾社会が「族群」以外の多様な軸によって形成されるということは、台湾社会はそ

れだけ捉えどころのない社会になりつつあることに繋がる。台湾社会を分析する側にも「族群」以外の多様な軸を見据えた分析枠組みや方法論が一層求められることになる。本書で提示される台湾社会論は的確かつ示唆に富み、台湾研究者のみならず、台湾に関心のある様々な人々に勧めたい重要書である。

注

(1) 若林は王甫昌著『族群』（王 2014）の解説において本書の考察を行っている（若林 2014）。

(2) <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/2015SSM-PJ/>（2018年3月15日取得）を参照のこと。

(3) <http://jgss.daishodai.ac.jp/>を（2018年3月15日取得）を参照のこと。

(4) <http://www.ios.sinica.edu.tw/sc/index.htm>（2018年3月15日取得）を参照のこと。

(5) 閩南系本省人（福佬人）、客家系本省時、外省人、原住民、その他の族群という分類を用いている（調査年によって若干異なる場合がある）。

(6) 2010年実施の調査データ。

(7) 2003年実施の調査データ。

(8) 1994年、2004、2009年実施の調査データ。

(9) 2009年実施の調査データ。

参考文献

笠原政治・植野弘子編（1995）『暮らしがわかるアジア読本 台湾』河出書房新社。

寺沢重法——（2015a）「現代台湾において日本統治時代を肯定的に評価しているのは誰か？—「台湾社会変遷基本調査」の探索的分析」『日本台湾学会報』第17号、226-240。

——（2015b）「慈済会所属者の族群と社会階層は多様化しているのか？—TSCS-1999/2004/2009の分析」『宗教と社会貢献』第5号第2巻、27-42。

——（2016a）「台湾における職業階層と宗教性」『藤女子大学人間生活学部紀要』第53号、9-34。

——（2016b）「日本統治時代への肯定的評価に対する族群および社会階層の影響関係—多母集団共分散構造分析を用いたコーホート別比較」『21世紀東アジア社会

書評 沼崎一郎『台湾社会の形成と変容—二元・二層構造から多元・多層構造へ—』(寺沢 重法)学』第8号、75-91。

Terazawa, Shigenori (2015) "Is Ethnicity a Differentiating Factor of Religiosity in Taiwan?" *Bulletin of the Graduate School of Letters, Hokkaido University* 147: 39-92.

沼崎一郎 (1998) 「エスニシティと社会階層」若林正文編『もっと知りたい台湾 第2版』弘文堂、46-68。

—— (2012) 「第1章 社会の多元化と多層化—1990年以降のエスニシティと社会階層—」沼崎一郎・佐藤幸人編『交錯する台湾社会』アジア経済研究所、37-68。

—— (2013) 「第3章 グローバリゼーションと社会の多元化がもたらす不平等—台湾の新しい格差問題—」佐藤嘉倫・木村敏明編著『不平等生成メカニズムの解明—格差・階層・公正—』ミネルヴァ書房、53-77。

若林正文編 (1998) 『もっと知りたい台湾 第二版』弘文堂。

若林正文 (2014) 「解説 王甫昌著『族群 現代台湾のエスニック・イマジネーション』」王甫昌 [松葉隼・洪郁如訳] 『族群 現代台湾のエスニック・イマジネーション』東方書店、153-116。

王甫昌 [松葉隼・洪郁如訳] (2014) (=松葉隼・洪郁如訳) 『族群 現代台湾のエスニック・イマジネーション』東方書店。